

## 京都新聞賞

### 「制服に見る男女格差」

京都府立福知山高等学校附属中学校 2年  
辰 巳 讚 良

今、日本で生活していると、男女の格差を感じることは、ほとんどない。しかし、私は、まだ多くの女性差別が残っていると感じている。その一つが、女子の制服である。

実は、私は制服のスカートが好きではない。普段、パンツ姿でいることが多いこともあり、制服のスカート着用に大きな違和感を感じている。その理由として、第一に、動きにくいということが挙げられる。私は通学で自転車を使うが、風などでスカートがめくれぬか、タイヤに引っかからないか、と気をつけなければならない。第二に、常に人の視線を気にしなければならない。階段などでは、スカートの中が見えないか、常に後ろに気を配る必要がある。また、脚の形がむき出しになることで、男子からどのように見られているのか、視線も気になる。

以上のことから、とても機能的とは思えない制服のスカートを、私たち女子だけ着用しなければならないことに、「それが女性らしく見えるから？」と日頃から疑問に感じていた。

そのような思いもあり、私は昨年秋、初めて冬季のみ許可されている制服のパンツを着用した。スカートに違和感を持っている私にとっては当然の選択だったが、その時びっくりするようなことを多く体験した。

こそこそ何かを言われることや、何度もジロジロ見られることはごく普通のこと。それどころか冬季にパンツを着用できることを知らない人も多く、「目立つといじめられるよ。」と忠告してくれる友達すらいた。勿論、中には「かっこいいね。」と言ってくれる友達もいた。しかし、女子のパンツ姿が増えることはない。一体どうしてだろうと私は思った。

それは、制服に関して、女子や男子はこうあるべきだという考え方が、未だに根強く残っているからではないかと私は考える。私のパンツ姿を「いいね。」と言ってくれた友達の中にも、「本当は着てみたかったけれど、親に反対された。」「着ている人がいなくて、着る勇気がなかった。」とこっそり打ち明けてくれる人がいた。本人にその気持ちがあっても、周囲の環境が許さない場合もあるということだ。日常生活では、男女の区別のないユニセックスデザインの服も増えてきている。だが、制服だけは、21世紀の今になっても、男女の性差が強調されたデザインが使われ続けている。

そもそも、「制服」とは何なのか。調べてみると、着物だった女子の通学服が洋装に切り替わったのは、一九一九年に当時、私立の女学校長だった山脇房子氏により、制服としてワンピースが考案されたからだと言う。着物より安くて動きやすい洋装は、瞬間に広がり、昭和に入るとセーラー服が優勢になった。もんぺの着用を強いられた戦時下を経て、戦後はセーラー服に加えてブレザーも人気を広げた。

こうして女子の「制服」について、その変遷を振り返ってみると、時代の制約がある中で、着ている女子本人がいいと思ったものが結果的に残っているのだと感じる。そして、もし、そうであるならば、制服のパンツも、それを許す環境さえ整えば、制服選びの選択肢の一つとして、普及していくことも可能なのではないだろうか。

「たかが制服じゃん。」と言われるかも知れない。しかし、女性にのみ「こうあるべき」ということを強制する社会は、男性にとっても、そして誰にとっても暮らしやすい社会ではないはずである。

最近では、自分に合った制服を選択できる学校が増えてきていると聞く。私自身は性同一性障害ではない。しかし、そうした人たちも含めて、誰もが自分らしく、生き生きとした学校生活を送ることができるようになるために自分に合った制服を選ぶことが、当たり前の社会になってほしいと、私は思う。